

吉澤夫婦のライフストーリー

ー繋がりー

盧雨欣 西森美琴

人は生まれてから無数の繋がり結びついています。人との繋がり、町との繋がり、そして、自然と世界との繋がり。人々はいつも自分がありふれる生活を送っていると思いますが、一人一人持っている繋がり独特で、自分しか持つことの出来ない宝物です。

色々な繋がりの中に生きている人々はそれぞれの人生を送り、けれどもある時のある所で出会い、新しい繋がりを作るのです。

秩父別町に生活している吉澤夫婦もそうです。ここには、吉澤さんが持っている三つの繋がりがあります。

・ かぼちゃから始まるストーリー

優しい笑顔、それが吉澤夫婦から伝わってきた第一印象でした。奥さんよりかなり高い背丈、逞しい体付きをしている淳さん、物腰柔らかで、さらっとした短い髪をしている真由美さん。二人が一緒に座っているだけで、なぜか安心感がもたれます。そういう安心感はたぶん、長年畑の世話をしている人ならではの特性でしょう。

親の後を継ぎ、米とそばを栽培していた吉澤夫妻ですが、ある日特に仲が良かった四軒の農家さんとの間で新しく生食用のかぼちゃを栽培してみないか、という話が上がりました。

そして、どのようにしてかぼちゃを栽培するかを話し合い、また、かぼちゃの苗を植える忙しい時期には、まるでそれぞれの家の仕事をみんなでやるかのように協力し合って農業に取り組んでいました。

「新しい作物を栽培するということで、楽しいことも苦しいこともありましたが、その農家の集まりに行けば全て解決しました」と、吉澤さんはこう言いました。「苦しいときは必ず誰かが助けてくれる。また、嬉しいことがあった時も自分のことのように喜んでくれる、そういった仲間が周りにいてくれたことはとても大きいことでした」。

また、栽培が軌道に乗ったかぼちゃですが、売り物のかぼちゃは皮に傷がついてしまうと商品価値が下がってしまい、そのままでは売ることができなくなってしまいます。そのため、傷がついてしまったかぼちゃを見ると、真由美さんは少し悲しい気持ちになりました。

しかし、ある日真由美さんはその傷が盛り上がっていることに気が付きました。そのことを真由美さんは面白く感じました。そして、趣味としてわざとかぼちゃに傷をつけることで親戚の名前などを彫り、プレゼントしていました。その後、その名前など彫ったかぼちゃが市場の人の目に留まり、正式な商品として市場に出すことになりました。今では、生食用ではなく、装飾用のおもちゃかぼちゃを栽培しています。お客さんから事前に予約をもらってそれをおもちゃかぼちゃに一つ一つ手作業で彫ってハロウィーンの時期に間に合うように出荷します。こうしているうちに、かぼちゃ栽培はどんどん盛んになりました。そして、ハロウィーンの時に吉澤さんが作ったかぼちゃはめざましテレビの机の上に飾られていることになりました。

楽しく、しかも収益化できている、ということで趣味から転じたおもちゃかぼちゃの事業は真由美さんにとっての農業のやりがいの一つでしょう。

・ 風雪の中で繋ぐ手と手

吉澤さんが小学校を通っていた時、同じ学年は二つのクラスしかなかったです。30人ずつのクラスですから、自分のクラスだけではなく、隣のクラスの皆とも仲良くしていました。一緒に勉強したり、遊んだりして、小学校から中学校までの時間は皆で共有していました。

今と比べると、何十年前の当時は遊べるものは少なかったですが、皆で遊び方を考えて遊ぶのはいつも楽しかったです。土、砂、石...そういう普通なものですが、その時の子供たちにとっては一番のおもちゃでした。友達の家に行く時も今とは違って、ただ他愛のない話ばかりしていました。しかし、そういう純粋さがあるからこそ、今はよかったなと思うのです。

皆はこうして一緒に大人になり、今でも時々集まります。それはきっと、クラスメイトの関係というより、一緒に成長してきた仲間と言った方がいいのかもしれません。

そして、当時の子供たちには横の繋がりだけではなく、縦の繋がりもありました。地域の子供たちは同じ子供会に参加していたので、色々な活動に共に参加しました。だから、当時の秩父別の子供たちにとって、年齢関係なく、皆仲良くしていたのです。このような上下の繋がりも日常生活に現れていました。

秩父別は北国の町なので、冬になると天気が悪くなる時もあります。そういう時は午前中で授業が終わり、皆で一緒に帰りました。六年生が先頭になって、一年生はまだ幼いため、風に当たらないように間に挟まれていました。

たぶんそれは当時の子供たちにとってはごく普通なことだったかもしれませんが、そういう小さい出来ことの中に暖かさがありました。このような暖かさを浴びながら成長してきたからこそ、子供たちは優しい大人になれたのでしょう。

・ 人と自然、記憶に残るホタル...

普段農業に携わっている人にとって、土地はなにより特別な存在です。それについて、吉澤夫婦も深く感じています。

吉澤夫婦は二人とも農家の出身で、親の後を継ぎ、今も農業に携わっています。農業をするのはとても大変で、忙しい時期は朝4時頃に起きて一日中ずっと畑仕事をしています。他の人から見ればとても耐えられないぐらいの仕事量ですが、それは吉澤夫婦にとっては平凡の毎日です。

「一つだけやるとやっぱり大変な思いしかないけど、種をまくところから順番にやって、そして最後に収穫して、最後までやったら、面白かったという話にはなる」と吉澤さんはこう言いました。農作物を育てる実感を味わう、それは農家にとってとても大事なことです。土の上で、自分が育てた作物がどんどん大きく高くなって、そして収穫の日を迎える、そういう喜びも土地に頼って生活する人の特権でしょう。

畑がなければ生きていけない、だから、大地を尊敬し、愛するのです。

農業以外にも、大地との繋がりがありました。秩父別は自然豊かな町なので、ここで見える大地の姿は全く違うものです。

吉澤さんによると、昔の秩父別には蛍が飛んでいました。わざわざ遠いところに行って蛍を見る人もいますが、昔のここでは、ただのありふれた風景でした。澄んでいる夜空に

キラキラしている星たちと野を舞う蛍、それは綺麗な景色だったのでしょう。

蛍のほか、川の中で泳いだり、魚を取ったり、野でカエルの後を追ったりする記憶も吉澤さんたちの心の中に残っています。

今の秩父別には蛍はもういませんが、ここではやはり都会では感じない自然の美しさを楽しめます。自然と人、土と人の繋がりも昔のように何一つ変わったことはありません。こうした繋がりが存在していれば、蛍もいつかきっと帰ってくるかもしれません。



*インタビューが終わった後撮った写真

もちろん、吉澤夫婦の持つ繋がりはこちらに書いた三つだけではありません。一人一人の持つ繋がりには数え切れないほど多くで、その中には生涯気付けられることのない繋がりもあります。しかし、気付かれなくても、それらの繋がりには消えることなくちゃんと人々の傍にあります。

繋がりとは長くても細い糸、一本一本の糸が撚り合い、それで人生が成り立ちます。そして、その糸を紡ぐのもまた私たち人間です。

美しい心を持つ人々のいるところはいつも暖かくて笑い声が溢れています。それが一番寒い北国の町でもそうです。

秩父別は正にそういう町です。